

Go! my way

高橋 紀子

一年半前に長野県の八ヶ岳中央農業実践大学校を卒業し、実家の余目町で農業を始めた。近ごろ、新しく農業を始める人が少しずつ増えてきていると言われながらも、私のように二十代の女性が新しく農業を始めるケースはやはり珍しいようだ。

今は多くの農家が兼業農家となっているが、わが家は専業農家として、曾祖父の代からの土地を受け継ぎ農業を営んでいる。私はその長女として生まれ、幼い頃から跡を継ぐことを期待されて育った。「農業を継ぐよ」と言えさえすれば、家族が安心することとは子供心にわかっていった。高校卒業後に北海道にある酪農学園大学に進学することも私にとっては自然な選択だった。

大学三年生になると、同級生の多くが着慣れないリクルートスーツに身を包み、就職面接へ慌しく向う姿を見て、自分とは関係ないと思いつつも焦りを感じていた。また、これまで将来は農業という職業の選択しかないと考えていた私の心の中に「私はなぜ農業をしたいのか」、「私はどんな農業をしたいのか」、「私らしい農業とは何か」という疑問が湧き出してきた。いま思えば、とにかく目指す目標が欲しい

かったのだと思う。家は稲作農家ではあるが、これからは米だけに執着した農業ではなく、何か違う事をやらなければという思いはあったが、具体的に何をすべきかは全く考えた事がなかった。ここから私の農業者としての自分探しが始まった。さまざまな本をむさぼり読み、大学の先生に相談し、自分がやりたい農業とは何か考えた。だが、焦れば焦るほど自分がやりたい農業の姿は見えてこない。かえって自分を見失い、自信をなくすだけだった。

そんな時にラズベリーに出会った。まだ日本では栽培事例は少ないが、将来デザートなどへの需要も伸びそうだった。「ラズベリーの事を学びたい」と思った私は、八ヶ岳にある中央農業実践大学校で、ラズベリーと花の栽培を学ぼうと長野に行く事を決めた。学校に果樹の実習はなかったが、学校は私のために、特別に週二回ラズベリー農園へ実習に行くことを許可してくれた。ラズベリー農園でお世話になった農場主は、定年後に長年の夢だったラズベリーの栽培を始めて十年という方だった。きれいに整備されたラズベリー農園を見て私は、「いつになったらここまで出来るのだろうか」

と、焦る思いを告げると、「何も焦ることはないよ。たくさん経験して、たくさん失敗してやっとわかることばかりなんだから。わたしも毎年挑戦し続けているんだよ。だから農業は面白いんだ」と笑って励ましてくれた。

今年、待望だったラズベリーの栽培に取り組んだ。ところが風の影響でせっかくの苗が半分ほど倒れてしまった。庄内特有の風の威力をあのどつていたために起きてしまったことだった。長野と同じようなやり方はダメなのだ。でも、失敗こそ先生。焦る必要もなければ、これで自信をなくす必要もない。農場主のあの言葉を思い出した。

農業者としてもラズベリー栽培も私はまだスタートしたばかりである。私が進もうとしている道はまだ誰も進んだことのない道。道なき道をこれから自分で切り開いていかなければならない。一生が自分探しの旅なのだと最近気がついた。

私には「いつかラズベリーを通して、生産者と消費者がつながっていることを実感できる農業をしたい」という夢がある。これからはその道を切り開くためにまっすぐ進み続けたい。

(農業・余目町)